

週日の説教

金 大烈 神父 2011年6月16日(木)

《日ごとの糧を今日もお与えください -へりくだる心で、神様を頼りましょう-》

今日は、第一朗読(二コリント 11・ - 11)も福音(マタイ 6・7 - 15)も、神様が悟らせてくださっているような内容でした。

第一朗読には、2000年前に初めて教会という共同体が出来た時にも、今のようない問題のあった様子が書かれています。2000年前、聖霊降臨によって使徒たちが聖霊をいただき、教会が公式に始まった時にも、やはり人間的な葛藤は結構あったようです。

新約のいろいろなパウロの書簡をご覧になれば皆様も感じられると思うのですが、パウロはある意味でよそ者でした。イエス様が直接選んだ使徒ではありませんでした。イエス様の復活の事件が終わってから弟子となり、それ以前は逆にイエス・キリストを信じている人々を迫害する者の一人でした。そのようなよその者が、他の国に行ってキリストを述べ伝えている、という噂が流れ、使徒たちの耳に入った時、使徒たちが疑ったのは当然でしょう。“私たちの知らないパウロという者が、私たちの主イエス・キリストを述べ伝え、人々が引きつけられているようだが、それは正しいのかどうか”という話し合いが使徒たちの間であったと思います。“しかも、噂によるとその人は、以前はキリスト信者を迫害していたのに、今では180度変わって、イエス様を述べ伝えている。それは本当に神様の、イエス様の働きによるものなのだろうか。”といろいろ疑ったと思います。新約の書簡を読んでもそのような葛藤の現れている箇所が何箇所もあります。

更に、兄弟子であつたペトロとパウロとでは性格が合いませんでした。好みもやり方も、考え方も、全然違いました。ですからたまにぶつかりもあつたようです。それでも、二人の間にはイエス様がいらつたので、お互いに譲り合つたのです。しかし、結局その性格の違いの壁を乗り越えられなくて、別々にイエス様を述べ伝えました。

そのようなことは、この教会だけでなく全ての共同体の中にもあると思います。司祭たちにも、いくら頑張っても気が合わない相手があります。司教と司祭、司祭と信徒、一人一人はみんな熱心な信仰を持っているのに、お互いに合わないことがあります。それは、2000年前から続いているものなのかもしれません。

とにかく、たくさんの弟子たちのいるグループと、一人で行動しなければならなかつたパウロを比べてみますと、やはりパウロのほうが寂しかつたと思います。そして、彼は他の弟子達と違って自分の仕事を持っていました。教会からの報酬ではなく、自分の仕事で生活を支えていました。それはテント作りの仕事です。更に、彼は癲癩てんかんという特別な病気を持っていました。そのような病気を抱えながら、一人で、そしていろいろな冷たい視線の中、信者からもねたみや疑いの目で見られながら、彼は自分の全ての使命を果たした偉大な方でした。

更に、何よりも大きい彼の役割は、12人の弟子たちにもできなかった神学を建てるという仕事を行ったことでした。イエス様は、直接教えた12人の弟子たちではなく、パウロをとおしてその仕事を成し遂げたのです。パウロは、正しい神学、イエス様についての説明を文章できちんと書けました。12人の弟子たちの中には、勉強をした人は一人もいませんでした。しかしパウロは、学問という点で最高の環境で育ち、素晴らしい能力を持った人でした。だからイエス様が必要としてパウロを選ばれたのでしょう。12人の弟子たちにできないことを、彼をとおして成し遂げよう、というみ旨だったのだらうと思います。

とにかく、教会の全ての教えの基本にはパウロの精神が含まれています。彼の教え、彼の説明が全部入っています。そういう意味で、使徒パウロを見習おうとする心が必要だと思います。

さあ、福音についてお話しします。今日の福音は『主の祈り』についてでした。『主の祈り』については、子どものころから今まで、全て考えつくしたとっていました。しかし今日、ありがたいことに、ミサに入る前に思い浮かんだことが一つありました。私が生まれて初めて感じたことですから、皆様も初めて聞かれる内容だと思います。今まで私が考えたこともないことが思い浮かびました。これも聖霊の働きだと私は信じています。

私の目が留まったのは、「わたしたちに必要な糧を今日も与えてください。」という文章です。主の祈りは、イエス様が直接弟子たちに教えたものです。つまり、イエス様の御心が全部集約されている祈りです。同時に何よりも御心が表れている祈りであることも私たちには分かっています。今日初めて思い浮かんだのは、なぜイエス様は私たちが死ぬまで食べられるだけの食べものを願うように教えてくださいなかつたのか。なぜ、今日だけの糧を求めなさいとおっしゃったのか。ということです。そう思われませんか。もし祈るのならば、“死ぬまで食べることに困らないようにしてください”と祈ればよいではありませんか。しかし、今私たちが捧げている主の祈りには「日ごとの糧を」と書いてあります。それは「とこしえに食べられる食事をください」という意味ではありません。そしてそれに関連するイエス様のたとえ話があります。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値のあるものではないか。」(マタイ6:26)という話です。

イエス様が私たちに言おうとしたのは、こういうことだと思います。先ずへりくだること。自分を低くする心を持つこと。もし食べ物がたくさんあって満たされたら、その人がへりくだる可能性は低くなります。“毎日へりくだる心で神様に頼り、食べものを求める謙遜さが無ければ、いつも誘惑に陥る”というメッセージが入っているのではないかと今日考えました。

皆様はどう思われますか。私ならば、日ごとの糧ではなくて、“一生の糧をくださるように祈りなさい”と言ったかもしれません。しかしイエス様は、“いつも今この瞬間のことを求めなければならない”と強くおっしゃっているのだと思います。

私が知る限り、皆様も毎日謙遜な心で信仰の生活をしていらっしゃるのが分かります。これは嘘で

はありません。気になるくらいの欲望に巻き込まれている人はまだ、少なくとも毎日のミサに与っている皆様の中にはいらっしゃいません。今のような心で歩むことが幸せに歩む道ではないかと私は思います。

もし誰かから「生きる意味とは何でしょうか。」という質問を受けたら、「私たちが生きる意味は、『善く生きて、幸せに生きること』です。」と教えてください。それが神様の御心です。私たちは無条件に幸せにならなくてははいけません。それにふさわしい答えは私たちが探さなければならないと思います。

ありがとうございました。

－ ミサの後 －

ペトロとパウロの性格の違いについて少し補足説明します。パウロは褒められないと気のすまないタイプでした。生まれつき人に褒められることを望む性格でした。ペトロは逆です。彼は内向的な性格で、純粹です。ですから人の前に立ってあれこれ言うのが好きではありませんでした。純粹すぎて、何かに感情が動いたらすぐに言葉にしてしまう人です。「私は愛しています。絶対あなたを裏切りません。」と言いながら何回も裏切ってしまい、悲しくて泣いてしまう。そういうタイプです。そのような性格の二人ですから、私が考えても絶対に合わないと思います。

では、私はどちらだと思えますか。実際に私が合わないのはパウロです。しかし、彼の話が間違えていないことは私も認めなければなりません。それで腹が立ったこともあります。そういうことを受け入れるにもいろいろ修練が必要ではないかと思っています。